国立国語研究所学術情報リポジトリ

〈論文紹介〉
渡辺由貴「文末表現『と思ふ』と『とおぼゆ』の史的変遷」『日本語文法』15(2): 116-132. (2015)

メタデータ	言語: Japanese
	出版者:
	公開日: 2016-03-16
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 渡辺, 由貴
	メールアドレス:
	所属:
URL	https://doi.org/10.15084/00000836

〈論文紹介〉

渡辺由貴
「文末表現『と思ふ』と『とおぼゆ』の史的変遷」
『日本語文法』15(2)：116-132.（2015）

渡辺 由貴

本稿は，近代にいたるまでの文末表現「と思ふ」と「とおぼゆ」の使用状況を明らかにし，両表現を中心とした思考動詞による文末表現の変遷を検討したものである。

動詞「思う」は，（1）（2）のように，「と思う」の形で文末に用いられ，発話者主体で非過去・非否定という条件で，モダリティ形式として用いる場合があり，現代日本語において多用される重要な表現となっている。

（1）　明日は雨が降ると思う。
（2）　これで終わりにしたいと思います。

このような文末思考動詞としての「と思う」は，文中の「と思って」や，進行形の「と思っている」と異なり，「思考する」という動作自体を表すという性格が薄く，一種のモダリティ表現として使われる（仁田 1991，森山 1992 等）。分析的な形式の推量表現が用いられることは，近代以降の日本語の特徴であり，「と思う」もその一つとされる（北原 1982: 151 等）。具体的には，その内部に判断・叙述等の表現をとり，推量表現的に使用される（1）のような「と思う」は近代以降，口語文においてその使用が増加したものである（渡辺 2007）。

しかし，文末でトを伴う思考動詞という形式自体は古くから用いられており，例えば中世軍記物語には，内部に願望や意志表現をとる「と思ふ」が多くみられる（渡辺 2007，2011）。また中世には，現代語では使用されない「とおぼゆ」がその内部に判断や叙述の表現をとる形で多用されている。現代語以外にみられる文末の思考動詞が，現代語のそれと同等の意味・機能で使われているかについては慎重な検討が必要だが，一人称で，「ト＋思考動詞の終止形」という複合形式が一定数用いられていることが確認でき，これらの形式は，少なくとも現代語の文末思考動詞につながるものとして検討しておくべきものであろう。

中世まで，「とおぼゆ」は（3）のように，その内部に外界の事物についての情報をとる形式で用いられた。一方，「と思ふ」は（4）のように，願望・意志表現等，主として話者自身の心のあり方の情報をその内部にとる表現として用いられた。

（3）「敵の馬の立て様，旌の紋，京家の人と覚ゆるぞ。…」（『太平記』2　p.175　長谷川端（校注）『新編日本古典文学全集 55』1994　小学館）

(4) 「…，われらまでも，一蓮の縁をむすばばやと思ひ候也。…」（『曾我物語』p.418 市古貞次他（校注）『日本古典文学大系 88』1966　岩波書店）

このように，中世には「と思ふ―とおぼゆ」という対応関係がみられたが，「とおぼゆ」は動詞「おぼえる」が記憶の意味に特化していったのと同時期に衰退傾向をみせる。そして，既に多用されていた「と思ふ」との対応関係が明確な「と思はれる」が，「とおぼゆ」を引き継ぐこととなった。

(5) シバシ有テ，池中ヨリ物有テ頭サシ出ス。水面ニアラハルヽ所，半身バカリト思ハル。（『孔雀樓筆記』p.282　中村幸彦他（校注）『日本古典文学大系 96』1965　岩波書店）

(6) …，我ながら我爲た事の馬鹿らしさに，殆どいふべき言葉をも看出し得ぬのであるが，しかし考へて見ると，妻の誤解したのも無理はないと思はれる。（『其面影』p.311 伊藤整他（編）『日本現代文學全集 4』1962　講談社）

ただし，「と思われる」は主に文章語で用いられる表現であるため，より口語的な表現において使われやすい「と思う」が，近代以降その内部に外界の事物についての情報をとり，(1)のような一種の推量表現としての用法にまで拡大するのを妨げなかった。

このように，「と思う」の拡大と「とおぼゆ」の衰退とには少なからず関連性がうかがえ，中世において「とおぼゆ」という形式が用いられていたこと，推量表現としての性格は持たないものの，「と思ふ」が表現形式としては多用されていたこと等，二種の思考動詞表現が分担しつつ発達していたことが，近代以降，「と思う」による推量表現が発達する土台となったと考えられる。そして「と思う」の発達により，「ゆ」「れる・られる」等の受身・自発形式を伴わなくとも文末思考動詞が外界の事柄内容を直接受け，推量の意味を表示できるようになり，また，口語的な表現の中でも文末思考動詞による推量表現が多用されるようになった。

●参照文献●

北原保雄（1982）「動詞性述語の史的展開（3）叙法」川端善明他（編）『講座日本語学 2 文法史』141−161．東京：明治書院.
森山卓郎（1992）「文末思考動詞『思う』をめぐって―文の意味としての主観性・客観性―」『日本語学』11(9): 105−116．東京：明治書院.
仁田義雄（1991）『日本語のモダリティと人称』東京：ひつじ書房.
渡辺由貴（2007）「『と思う』による文末表現の展開」『早稲田日本語研究』16: 37−48.
渡辺由貴（2011）「中世における文末表現『と思ふ』と『と存ず』」『早稲田日本語研究』20: 34−45.

渡辺 由貴（わたなべ・ゆき）

国立国語研究所コーパス開発センター プロジェクト非常勤研究員。修士（文学）（早稲田大学）。2014 年 2 月より現職。主な著書・論文：「『虎明本狂言集』における「と思ふ」と「と存ず」―『日本語歴史コーパス』を利用して―」（『国立国語研究所論集』9，2015），「帝国議会会議録における文末思考動詞」（『早稲田日本語研究』23，2014）.